

IV. 国策紙芝居班各務原調査 ——役場吏員の活動にみる戦時下各務原地域の紙芝居活動

松本 和樹

はじめに

岐阜県南部に位置する各務原は、中心部に各務原台地が広がり、明治時代には養蚕やさつまいもを中心とする農村地帯だった。その後、1917（大正6）年、稲葉郡那加村（現、各務原市那加）に陸軍各務原飛行場が開設されると、川崎航空機、三菱重工業などが進出し、航空機産業を中心とする工業都市として発展したが、1945（昭和20）年の空襲で甚大な被害を被った*1。こうした歴史を持つ各務原市では、各務原市教育委員会が市内の戦時資料の収集を行っている。その成果は展示や目録などで公開され、1998（平成10）年7月には各務原市歴史民俗資料館が『各務原市戦時資料目録』を刊行して7000余点に及ぶ戦争関係資料を掲載している。この一つが紙芝居であり、関係資料74点（紙芝居55点、紙芝居広告など19点）を確認できる。これら紙芝居については、後藤康行氏が軍事郵便を分析する資料として活用しているが、資料の来歴や地域性については触れていない*2。研究班では、紙芝居中に大政翼賛会地方支部作成のものが含まれていること、関係資料が豊富に揃っていることから、2022（令和4）年5月12日、13日の2日間、各務原市歴史民俗資料館の木曾川文化史料館で、各務原地域での戦時下の紙芝居活動に注目して資料の閲覧、撮影を行った。

一. 調査概要

今回の調査では創作紙芝居も含め紙芝居24点を撮影

した。そのうち、新規に所蔵が判明したものや、新たに撮影したものなどについては下表の通りである。

『虹の凱旋門』は人形劇の図書館で撮影したものの、表紙や一部に抜けがあり、今回の調査ではじめて全部を撮影できた。『進み行く村（耕地交換分合）』は雑誌『紙芝居』第5巻第11号（1942年11月）の広告に掲載されていたものを新たに撮影することができた。また、撮影した作品には、『義農作兵衛』に「大政翼賛会蘇原村支部」の手書きと「岐阜県稲葉郡蘇原村役場」の所蔵印、『進め日の丸』に「岐阜県稲葉郡蘇原村役場」の所蔵印、『虹の凱旋門』に「岐阜市外蘇原村紫光〔原文ママ〕小野木義憲」の所蔵印を確認することができる【写真1】。このほか、館蔵資料では「大政

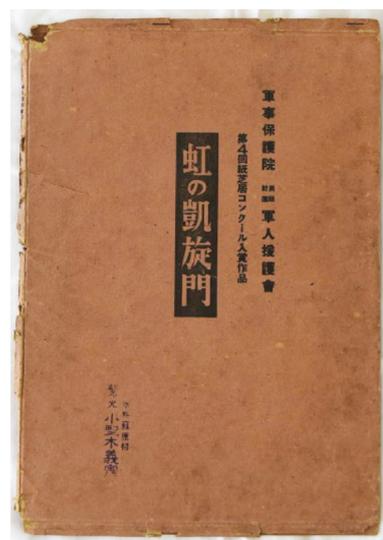


写真1 『虹の凱旋門』袋

【4】岐阜県各務原市歴史民俗資料館（木曾川文化史料館）

タイトル	作者	出版社	出版年	
1 久遠の輝	小野木紫風作	稲葉郡蘇原村翼賛会	不明奥付なし	新規発掘・手書き
2 稲葉号の献納	不明	稲葉郡画劇報国会	不明	新規発掘・手書き
3 この決戦（扉絵のみ）	小野木紫風作	岐阜県画劇報国会蘇原町支部	1945年2月（表紙から）	新規発掘
4 進め日の丸	浅場慶夫脚本・小谷野半二絵画、日本教育紙芝居協会製作	日本教育画劇株式会社	1941年8月	所蔵判明
5 虹の凱旋門	小貫武雄作、籠宮歌二画	大日本画劇	1941年9月	所蔵判明・完整版撮影
6 進み行く村（耕地交換分合）	田邊勝正指導、川尻泰司作・杉浦聖華画	農山漁村文化協会	1942年7月	所蔵判明
（参考・撮影）				
7 義農作兵衛	今井よね編；京極佳夕画	紙芝居刊行会	1941年6月	子ども・福岡



翼賛会稲葉郡事務局、「岐阜県庁内大政翼賛会岐阜県支部」といった所蔵印も確認できた。

館が自作紙芝居として所蔵している作品及び台本としては、①自作紙芝居『久遠の輝』、②自作紙芝居『久遠の輝』台本、③自作紙芝居『この決戦』扉絵、④自作紙芝居『稲葉号の献納』、⑤自作紙芝居一部（沖縄諸島の絵）、の5点を撮影した。このうち、③～⑤についてはいずれも扉絵や一場面のみとなっている。このほか、紙芝居関係資料として腕章や上演箱、広告や冊子類についても撮影した。館が所蔵する戦時下の紙芝居や関係資料は、戦時資料の収集の際に小野木稔氏（後述の小野木義憲のご子息）や左高義弘氏から寄贈を受けたもので、腕章は小野木氏、上演箱は左高氏による寄贈だという。

二. 役場吏員の紙芝居活動の実践

(1) 紙芝居を実演する

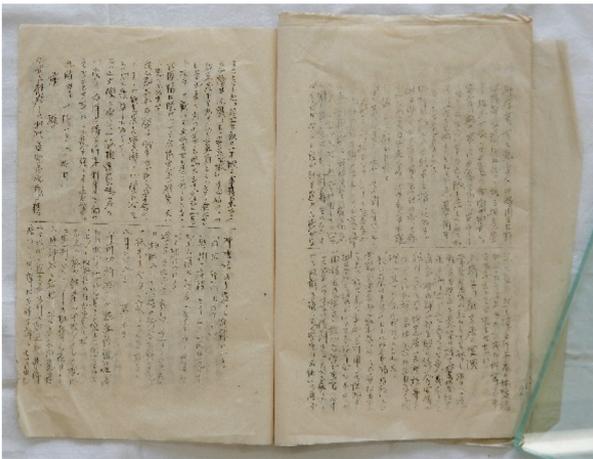


写真2 「実践感想録」

館が所蔵する戦時下の紙芝居には、しばしば「小野木義憲」の所蔵印が見られる。小野木義憲は、大政翼賛会稲葉郡支部の推進員として活動していた。その詳細を記したのが「実践感想録」である。「実践感想録」は、稲葉郡蘇原村（現、各務原市蘇原地区）の役場吏員だった小野木が、大政翼賛会稲葉郡支部の推進員に選出され、錬成講習会に参加した際の活動を記録したものである。錬成講習会は1941（昭和16）年の8月26日～28日、稲葉郡芥見村（現、岐阜市芥見）の真聖寺で2泊3日の日程で行われた。錬成会には小野木のほか、訓導、青年指導員（僧侶）、僧侶、警防班長の計5名の推進員が参加し、3日間にわたって講師による座学や座談会、運動、共同炊事などに取り組んだ。8月27日の午後8時から、小野木による紙芝居の実演指導が行われた。「実践感想録」には、この時の小野木の心情や会場の雰囲気などが詳しく記されている【写真2】。

常会運営の和やかさを増し明日への源動力を与ふる意味に於て翼賛紙芝居を織り込まれてあることは意義のあることと思ふ。横山郡支部長殿の誇大な宣伝で紹介されてこの紙芝居実演指導を命ぜられた筆者は遂に止むなく演壇に立つの余儀なくされた。

「紙芝居の先生」にしては貧弱な私、否貧弱が適当かもしれないがその責任を果す上に於て先づ実例を引用して説明する。「紙芝居は始めだ」と云ふ好奇心もあつたのか一般推進員諸君の熱心な顔が画面に集中して声一つせない静粛さに遂ひ釣り込まれて拙弁を振つて「愛馬の出征」を演ずることにした。昼食後の一寸暇を事務室で一度読まして戴いた「愛馬の出征」まだ初めての紙芝居であるので画面とくつきり合はない点が多々あつた事と思ひますが鼻氣目で拍手を戴いて赤面の次第であることを記憶帳に焼けつけて今後充分研究したいと思つてゐます。

横山郡支部長殿は手際良く「常会の手引」の紙芝居を実演され堂に入ったものだと感激してゐます。

この実演に依つて一般推進員諸君の非常に好評を得て将来利用する向の多きことを耳にして意を強くする次第です。

注目したいのは、小野木が自身を「紙芝居の先生」にしては貧弱な私、否貧弱が適当かもしれない」と認識して実演指導に臨んでいる点である。「紙芝居の先生」にしては貧弱」というのは、手際良く紙芝居を実演し、その様子が堂に入ったものだった横山郡支部長と比べて、自らが技術的に稚拙であるというように読み取れる。そのうえで小野木は「否貧弱が適当かもしれない」と続ける。この一文は、「自らの紙芝居実演者としての腕は郡支部長のような人物と比べて稚拙と周りに思われているだろうし、そうした周囲の評価が正しいかもしれない」と受け入れているように読み取れるとともに、その後続く「責任」という言葉と合わせて見てみると、例え稚拙であっても、紙芝居実演の担い手として大政翼賛会郡支部の推進員に選ばれた自分が、他の推進員の前で実演を行うことは支部での紙芝居活動の推進には重要だと、小野木が自らの役割を位置づけていたことをうかがわせる。ここには、大政翼賛会稲葉郡支部の画劇推進員に、役場吏員として参加していた小野木の立場を見ることが出来る【写真3】。自らの役割を認識していた小野木の文章からは、大政翼賛会郡支部の活動の中での紙芝居の意義を伝えるというつとめを果したことへの安堵、紙芝居の実演技術の向上を通じて郡支部の活動に貢献しようとする決意が読み取れる。



写真3 腕章

「実践感想録」には、小野木とともに「常会の手引」を手際よく実演した横山郡支部長のほか、3日目は練成会のプログラムの合間に、日野組織部長が「空晴れて」を実演している様子も記されている。郡支部長や組織部長が紙芝居をうまく実演していたことを示すこれらの記述からは、翼賛会稲葉郡支部における紙芝居活動の広がりがうかがえる。各務原での大政翼賛会支部による紙芝居活動については、『各務原市民の戦時記録』で言及されている。稲葉郡鵜沼村（現、各務原市鵜沼地区）で1943（昭和18）年3月に村長が各区長や各隣保班長に対し、大政翼賛会の鵜沼村支部に文化班を設置し、常会での紙芝居による教化活動を行うように伝えるなど、各務原の町村では大政翼賛会支部に文化班を設置し、隣組常会で紙芝居を上演していた*3。鵜沼村などの町村でみられる動きも、稲葉郡全体で大政翼賛会支部による紙芝居活動が盛んだったことをうかがわせる。館所蔵の紙芝居に見られる「大政翼賛会蘇原村支部」の手書きや、「大政翼賛会稲葉郡事務局」、「岐阜県稲葉郡蘇原村役場」、「岐阜市外蘇原村紫光〔原文ママ〕小野木義憲」などの所蔵印はこれを裏付けるものといえ、また、大政翼賛会稲葉郡支部の紙芝居活動のなかで、村役場が重要な位置を占めており、そのなかで担い手となったのが小野木であることを示している。

稲葉郡で積極的に行われていたような、岐阜県の翼賛会支部の紙芝居活動は、県下の紙芝居関係者を組織化した岐阜画劇報国会の活動へとつながっていく。岐阜画劇報国会は貯蓄奨励の運動などに会員を出張させて紙芝居を実演し成果を挙げており、県下の慰問や常会にも申し込みを受けて出張するという（「岐阜画劇報国会の結成―出張実演の申込に応ず―」『岐阜県常会時報』6月号第40号、1943年5月25日）。小野木たちが担った稲葉郡での紙芝居活動が、岐阜画劇報国会を通じて行われていたことは、腕章や外箱に「岐画」と記された紙芝居の上演箱といった道具からわかるだけでなく、蘇原村で行われていた紙芝居の自作活動からも確認できる。

(2) 紙芝居を創作する

稲葉郡では、翼賛会稲葉郡支部による紙芝居の実演活

動だけでなく、自前で紙芝居を創作していたことが、館が所蔵する紙芝居の扉絵などからわかる。これらの作品はいずれも扉絵や一場面のみで内容まではわからないが、稲葉郡における紙芝居活動の実態を知るうえで貴重な資料といえる。例えば『稲葉号の献納』は、稲葉郡画劇報国会が作成したもので、場面には「稲葉号」を前線へ送りませう。一機でも多く献納しませう」と書かれている【写真4】。軍用飛行機の献納を訴える運動は戦時下に広く見られたが、飛行機産業の中心地であった各務原地域で、紙芝居を創作して運動を広めようとしていたことは興味深い*4。



写真4 「稲葉号の献納」の一場面

岐阜画劇報国会との関連では、『この決戦』がある。扉絵のみで具体的な内容はわからないが、海戦の様子を描いた扉絵の下には、「昭和二十年五月二日作 岐阜県画劇報国会蘇原町支部小野木紫風作」と書かれている【写真5】。



写真5 「この決戦」扉絵

小野木紫風とは、小野木の狂俳での雅号である*5。蘇原村の役場吏員として働いていた小野木には、地域の文化人としての顔もあった。大政翼賛会稲葉郡支部の推進員として紙芝居の実演を行っていた小野木は、県が画劇報国会を組織して紙芝居活動を推進するなかで、紫風の名義で創作活動も行っていた。『各務原市民の戦時体験』には、小野木と思われる男性の「私は趣味で紙芝居を作



っていました。昭和十三年に岐阜県が企画した戦意高揚の画劇（紙芝居）コンクールで三位に入選しました。これを機会に大政翼賛会の一員として町役場に奉職しつつ、聖戦に協力することになりました。各部落の常会が毎月行われましたが、そこで紙芝居を通して戦争への協力を呼び掛けました。紙芝居は既製の作品が主でしたが、自作の作品も結構喜ばれました」という証言が見られる*6。証言からは、小野木の画劇推進員としての紙芝居活動が、趣味として紙芝居を創作する小野木の文化人的な側面と、役場吏員としての側面の両輪によって成り立っていたことがうかがえる。実演にとどまらず創作活動も積極的に行うことで、小野木は大政翼賛会稲葉郡画劇推進員という役割を果たそうとしたのではないか*7。

小野木は、稲葉郡蘇原村翼賛会作『久遠の輝』も手掛けている。『久遠の輝』は、召集令をめぐる兄弟の物語を軸に、大東亜建設の意義を説く作品である。町はずれの八軒長屋に住む國尾守は、妹春子とともに中風で寝込む父を看病しながら、近くの工場で働いて家計を支えている。そんな守のもとに、ある日の常会で陸軍歩兵の召集令が届く。入隊して訓練に励む守、その矢先に父の訃報が知らされる。隊長の許可で町に戻った守は、父の葬儀を取り仕切った後、大陸の戦地に向かう。妹の春子も従軍看護師として大陸に向かい、野戦病院で働き始める。そこに戦地で負傷した守が入院し、二人が再開したところで物語は終わり、紙芝居は大東亜建設の意義と、前線で戦う兵士への感謝をもって締めくくられる。紙芝居で目を引くのは常会の場面を描いた一枚である。八軒長屋の人びとが一堂に会する常会の場面では、魚屋の留公、チンドン屋の松サン、易者の竹どん、大工の棟梁の梅さん、そば屋の為さん、郵便屋の八さん、家主の菊さんなど、自営業を営む面々が個性的な顔つきで登場する【写真6】。こうした人物たちが「和やか」でありながらも「真剣」で「合理的」な常会を開いている場面からは、役場吏員として地域の人びとと関わっていた小野木が、どのように地域の人びとと関わり、「模範的な常会」の運営を目指そうとしたのかうかがえる。



写真6 「久遠の輝」5枚目

おわりに

各務原市歴史民俗資料館が所蔵する紙芝居や紙芝居関係資料からは、稲葉郡蘇原村の翼賛会支部において、紙芝居活動が実演だけにとどまらない創作を含んだ活動として展開されており、それが岐阜県全体の紙芝居活動ともつながっていたこと、こうした紙芝居活動のなかで、役場吏員であった小野木が地域の翼賛運動の推進員として積極的に紙芝居を実演、創作していたことが見えてきた。

このような各務原地域の大政翼賛会支部の紙芝居活動の広がりについて、県内他地域や全国との比較は今後の課題である。また、役場吏員、地域の文化人という立場から紙芝居活動に積極的に関わっていた小野木の活動を、これまで研究班が見てきた各地の紙芝居活動の担い手の中にどのように位置づけるかも、今後検討すべき課題といえる。

さて、今回の調査で各務原地域の紙芝居活動の実態を複数の資料から浮かび上がらせることができたのは、各務原市歴史民俗資料館による膨大な戦時資料の収集、整理あつてのものだった。共同研究を進めるうえで、地域博物館の地道で継続的な活動がどれほど重要かを再認識できた点でも、この調査は有意義なものであった。

謝辞

本稿執筆にあたり、戸崎憲一氏（各務原市歴史民俗資料館館長）はじめ、各務原市歴史民俗資料館木曾川文化史料館の皆様には、資料の閲覧、調査、巡見などで大変お世話になりました。この場を借りて御礼申し上げます。

※掲載した資料はすべて各務原市歴史民俗資料館所蔵で、各務原市歴史民俗資料館より許可を得て掲載しています。

- *1 各務原市戦時記録編集委員会編『各務原市民の戦時記録』各務原市教育委員会、1999年。
- *2 後藤康行「戦時下の紙芝居にみる軍事郵便の「理想像」」『日本歴史』796号、2014年9月。
- *3 前掲『各務原市民の戦時記録』、177頁。
- *4 『各務原市民の戦時写真』には、『稲葉号の献納』とともに、岐阜県が送った陸軍戦闘機「岐阜県第一稲葉号」や、稲葉郡蘇原村三柿野の樹屋旅館に置かれていた飛行機献納資金箱が掲載されており、稲葉郡での飛行機献納運動の盛り上がりを確認できる（各務原市戦時記録編集委員会編『各務原市民の戦時写真』各務原市教育委員会、1998年、101頁）。
- *5 狂俳は俳諧の一つで、名古屋を中心に流行していた。
- *6 各務原市戦時記録編集委員会編『各務原市民の戦時体験』各務原市教育委員会、1996年、174頁。証言が掲載された頁に、「自作の紙芝居『久遠の輝』の説明付きで『久遠の輝』の場面数枚が掲載されていることから、証言は小野木義憲によるものと判断できる。
- *7 小野木のような地域の文化人が、個人の立場から地域の翼賛運動とどのようにかかわっていたのか、という点については、埼玉県の翼賛文化運動の過程を個人の立場から分析した鈴木一史「翼賛文化運動の戦中と戦後—加藤芳雄旧蔵埼玉県翼賛文化連盟関係資料から—」（埼玉県立歴史と民俗の博物館紀要）第15号、2021年3月）を参照されたい。